

中部支部40周年記念座談会について

中部支部40周年記念事業実行委員会

1. まえがき

土木学会中部支部では、設立40周年の記念事業のひとつとして、2回にわたる座談会を開催した。

第1回座談会は、昭和53年9月12日(火)の昭和53年度第2回役員会開催前の1時間10分と利用して行われた。この座談会では、中部支部顧問・商議員の方々から、中部支部40年の歴史を振り返ってこられた人々の思い出、昭和12年に名古屋で開催された博覧会における土木技術者の貢献とその意義、土木学会の果たすべき社会的役割と学会強化の問題、中部支部の特色と支部事務所強化の問題など、貴重な発言がなされた。

第2回座談会は、昭和53年10月11日(水)の昭和53年度第6回幹事会開催前の1時間30分と利用して行われた。この座談会では、第1回座談会の記録が資料として配布され、その内容を復習しながら話と発展させる方法が進められた。中部支部幹事の方々を中心とした第2回座談会における主な発言内容は、土木学会員の増強と学会誌のあり方、土木技術者に対する資格、中部支部行事ならびに委員会のあり方、土木工学の大学教育についてなどであった。

座談会における全ての発言内容は、中部支部四十年誌続編(昭和54年3月発行)の第6章に紹介されているが、ここでは、2回の座談会における発言の中から、土木学会員ならびに中部支部の運営に特に係りのあると思われる内容について、(1)土木学会の果たすべき社会的役割、(2)土木学会誌のあり方、(3)大学における土木工学教育と土木学会、(4)中部支部活動のあり方、(5)土木学会の組織強化の問題の各項目ごとに発言内容の要点を紹介することにした。

2. 土木学会の果たすべき社会的役割

A : 昭和12年に、名古屋博覧会という大事業があり、非常に大きな区域に科学館や演芸館など名古屋市の土木局や水道局が分担して造った。その時に大勢の入場者があり、収入だけでも大変なもので、それで、東山動物園ができ、中村では大閼神社のところまで道路ができ、港まで電車が通るようになった。そして、博覧会場跡には、今日では、工場が建ち並んでいる。

それから40年後の今日、名古屋オリンピックが話題となっており、そのコンセンサスをとらなければという情勢にあるが、オリンピックを開催すれば、博覧会の時と同じように、地域の開発が大いに進むということは、土木屋は皆知っており、能力をあげて推進しようとする気持は十分にある。(しかし、その道程が長すぎると、誰かが何かと言ったことが一つの障害となって進まなくなる可能性は大きい。だから、土木学会も万博のみならずオリンピックでも何でも、もっと力に目をむける必要があると思う。学会にそう閉じこもらないで、社会的なことへも乗り出してもらいたいという感じがする。

A
B : 私どもとしては、市長は土木屋であってほしいという気持ち強い。市長や知事が土木屋であることによって、世の中が随分進歩していくことがあると思う。そのためには、その市長候補、状況はいないといけないが、そういう人を養うのは土木学会だという気がする。

- A : 近年、土木工学科を持つ大学が多くなり、土木科出身の大卒者も増大してきた。だから、これからは、土木屋をもっと大きく優遇できるような世界が来るだろうと思うが、土木的なテストの何かをやって、測量士とか技術士という専門家の層を厚くするのも土木学会の役割だと思う。土木屋のすそ野をさらに広げ、層を厚くし、我々が今考えていることを積み上げて実現してほしい。
- C : 土木学会は「学会」という名前が付いているが、この学会に出席すると、業界の方も官庁の方もスムーズに話し合えるということが非常にいいことだと思う。今の世の中はギスギスしており、お互いにものも言えないが、土木学会に来ると非常に仲良くやっている。このことが、仕事を進めようという潤滑油になっている。
- D : 昔から、土木というのは文化・文明の根元のように言われ、機械・電気・建築などは、みんなここから分かれていった。そして、今の土木の状態をみても、非常に専門化されたところがある。(しかし、今度は、それと主体的・総合的に集約するということが社会的に必要とな、てきているのに、そうしたところは非常に少ない。このことは、土木屋全体にかかわる問題であるので、土木学会が中心となり見直す機会を持つ必要がある。

3. 土木学会誌のあり方

- C : 土木学会は学会誌とずっと作ってきたが、あまりにも高等的すぎるということから、途中から論文集と学会誌に分けた。そのことで、一時的には読まず雑誌となったが、またその学会誌自体が少し高等的になりかけている。
- E : 特に、建設社の人達が読むには、全般的にあまりにもハイクラスという気がする。学会誌が送られてきたとき、パラパラとめくった中に自分の気に入ったものがあり、それと読むことで少しずつ自分達の仕事にクラスとなる。そんな学会誌のあり方を希望する。
- F : 土質工学会には入会しているのに、土木学会には入っていない人にその理由を聞くと、「土木学会誌を読んでみてもよく分からん」という返事がくる。土質工学会の“土と基礎”はわりと現場と密着したものとなっており、読んでみて興味のあるものが載っているが、土木学会誌の方は学校の先生ぐらいでないと分からないだろうと言う。私も同意である。
- G : ここ数年前から、特集号というのがよく出されているが、あれが非常に時世に合った内容を掲載しており、土木学会誌を保存しておきたいという気持ちにさせる。土木学会誌は特集号の形式になった方がいいのではないかなと思うときもある。
- H : 最近の土木学会誌には、工事記録が大分出てきたが、こういうのは施工技術者も読むのではないかなと思う。ただ、もう少し泥臭いものとなるとなおいいのだが、あまり泥臭くなると学会誌としての品位が下がるのでしょうか。

4. 大学における土木工學教育と土木学会

- D : 公害問題が出てくると、土木屋さんでもケミカルな面での知識を相当持っていないと、総合的な判断がなかなかできないだろうと思う。例えば現在、流域下水道に関する専門的な話を聞くと、我々には分からないことが多い。そういうことに対して、土木屋としてどう対処していくのかということもひとつの大きな問題だと思う。
- H : それから、土木屋が力に弱いということもある。土木工事をするときに必要な機械がある

わけだが、この機械については、土木屋がアイデアを出すと、機械屋がさっと作って売り込みにくる。そして、その機械に土木技術が振り回されてしまうという弱さがある。土木屋も、もう少しメカに強い勉強しないといけない。

I：大学における土木教育のあり方というのは、時代とともに変えていかなくてはならないという気がするが、どのように変えていったら良いのかよくわからない面もあると思う。学会本部もアンケートを取っているようだが、中部支部特有のものとして、建設業界やいろいろな方面の人達の要望を吸収し、中部地区での大学教育のあり方とまとめることも中部支部の重要な役割だと思う。また、現場における施工技術的なことを学校で教えて下さる方を、中部支部が窓口となり、推薦していただくと有難い。

D：かつて、雪国で隧道工事と付ったとき、隧道対策研究会をつくり、その講師と各ゼオコンのエキスパートに務めてもらったことがある。その経験からすると、実際の施工面の問題になると、ゼオコン関係に立派な方が大勢おられると思う。たとえ中部地区にいなくとも、東京・関西など全国には相当おられるから、お呼びすれば、参考になる名講義として下さると思う。

H：建設会社では、大学・高専・工業高校の卒業生と受け入れると、いちいち現場施工向きには込む。統計のととり方、人の使い方、見積り積算、構造物と造るとき、段取りの仕方、さらには型わく、鉄筋の組み方、コンクリートの打ち方にいたるまでの作業手順の一切を教える。そうして、一人前の土木屋になるには5～6年から10年かかる。こういうことを、学生のうちに学んで、ある程度頭に入れて卒業してくれれば、受け入れる側も受け入れ易いと思う。そして、就職と目前にした4年生などには、現場施工、技術者のあり方、組織、運営など実務的なことについて一講座設けて教えた方が、学生も安心して実社会に出られるのではないだろうか。

J：ゼオコンでは、新入社員が入ったとき、一番に力を入れて研修するのは測量である。測量のミスは大きな失敗につながるからである。近年、大学と出た人達の測量技術が意外に劣っているのを痛感している。

H：建設会社では、すぐ間に合う土木技術者を欲しがっているというのは事実だが、大学教育というのが基本的なことを教える場であるということには変わっていない。ただ、建設業界では、実部隊員が必要であるので、その点が、土木教育に関する考え方の差になっていると思う。

5. 中部支部活動のあり方

B：先程、環境問題と機械の問題の話があったが、支部の講習会や技術講座では、このように現在の学会員が当面している問題についての知識と強化するような企画と考えていかなくてはならない。

H：土木教育に関連して、大学では基本的なことを教えてもらっているが、実際に仕事とするにはそれ以外に何があるのだということと、土木学会の講習会で教えるのとよい。

E：建設会社に勤めるものとして、何か施工技術部会ということで、施工技術を中心とした講習会などを探検して下さることを希望する。例えば、昭和52年度講習会「基礎工事における失敗例と対策」などは、建設会社のものにとって非常に貴重なものであった。

H：中部支部では、講習会・講演会・研究発表会などいろいろな活動を行っているが、ただ、現在

の研究発表会というのは、建設業者には縁が薄い気がする。

B：この、中部支部研究発表会というの、他元における土木工事の情報交換ということで、内容が充実していくとよい。他元で経験していることの横の連絡の場ということで、ある職場でやっていることが他の職場でも役立つような情報交換の場になるとよい。

6. 土木学会の組織強化の問題

B：私は、昭和47年度中部支部幹事長を務められた高桑氏がずっと土木学会員と続けておられ、機会あるごとに土木学会の各種行事に参加され、人々の伴侶にしてこられたことに感心する。それと同じように、昭和46年度から昭和50年度まで支部役員を務められた長坂氏が、現在は病気になられ、もう学会誌と読んでも仕事に役立たせることができない立場になっているのに、ずっと学会員と続けておられることにも感心する。そして、このお二人から、土木学会に対する本当の愛憎というものを感じる。（高桑・長坂両氏の詳しい紹介は、中部支部四十周年誌続編の第4章中部支部功績賞と受賞された方々を参照されたい。）

K：先程、土木学会誌のあり方について、現在の土木学会誌があまりにも高すぎる、そのことが土木学会への入会をしにくくしているという意見があった。（しかし、土木というのはその範囲が広いものだから、土木の中でもまた専門の雑誌が沢山ある。だから、雑誌「道路」を出版している日本道路協会に入ると、もう土木学会には入らないということになる。こういうことを考えると、学会員を増やすということは大変なことで、単に学会誌だけを見直してみても、土木学会員は増えないのではないかという気がする。

E：今回、中部支部40周年を記念して、会員の増強を行うということであつたので、当社の社員に呼びかけた。先日、責任者の土木部長に「どのくらい入ったか」と聞いたら「20人くらいは入ったつもりですが」と答えた。このように、職場ごとの入会運動をやろうと思えばできるわけで、「もう、土木学会に入っていないような者は一人前じゃないぞ」というような考え方を広めることが大切だと思う。職場紙ではこのような配慮をするのがよいと思う。

G：私の職場紙では、月に500円ずつ学会員と徴収するという方式を採用している。現在、土木学会の年会費は6,000円であり、これと一度に払うのは実に嫌なもので、若い人の中には、年会費が6,000円であるということを知りただけで、入会するのをやめようという気になる。

7. あとがき

中部支部40周年を記念して開催した2回の座談会での発言内容の1部を紹介したが、昭和54年2月8日（木）の報告会当日には、中部支部学会員からの自由な発言をいただくために「意見交換の場」を設けている。より多くの学会員の皆様がこの席に出席され、土木学会あるいはその中部支部について目撃感していること、提案したいことと自由に発言していただきたい。皆様方の貴重な発言は、学会本部にも伝えて行きたいし、中部支部の運営にも生かして行きたいと考えている。